

第 9 回高校生カンボジアスタディツアー ニュースレター

立命館宇治高校 Yuzuki F.

「格差との出会い」

私は幼い頃からインドネシアのバリ島などの発展途上国で生活することが多く、身の回りには常に「格差」という現実がありました。裕福な家庭の子どもとそうでない子どもが全く違う環境で暮らしている姿を見て、「なぜこんなに違うのだろう」と疑問を抱くことが少なくありませんでした。特に印象的だったのは、子どもたちがゴミの山からお金になりそうなものを拾い、生計を助けている姿を目にしたことです。この経験がきっかけとなり、社会的・教育的な格差の現実を自分の目で確かめ、少しでも理解を深めたいと思い、今回のカンボジア・スタディツアーに参加しました。ツアーでは、寺子屋や病院、UNESCO プノンペン オフィスなどを訪れ、現地の子どもから専門家までさまざまな人と交流することができました。その中で、カンボジアの歴史、特にポル・ポト政権が人々の暮らしに大きな影響を与えていること、そしてそれを乗り越えて教育や医療の不平等を減らそうとする取り組みが進められていることを学びました。

「歴史が生んだ格差」

私たちはポル・ポトとクメール・ルージュによる破壊と暴力の象徴であるトゥール・スレン虐殺博物館とチュンエクにあるキリングフィールドを訪れました。事前に本や資料で調べていて知識はあったつもりでしたが、実際に現場に立つと、全く別の衝撃がありました。

トゥール・スレン虐殺博物館では、拷問に使われた金属ベッドや器具が当時のまま残され、壁には犠牲者の写真が無数に貼られていました。その一枚一枚の表情からは、恐怖や苦痛、そして命を奪われる運命が迫っていたことが伝わってきて、胸が締めつけられました。遊具までもが拷問に利用されていたと知ったとき、人間の残虐さに言葉を失いました。

さらにキリングフィールドでは、囚人たちが「家族に会える」と信じて連れてこられ、実際には集団墓地に葬られたという事実を知りました。頭蓋骨が 100 以上もひしめき合っていたと言われる場所を目にした時に、「殺すことそのものが目的だったのだ」と、歴史書では感じられない生々しさを体で理解しました。

こうした凄惨な歴史は人々の命を奪っただけでなく、社会の基盤そのものを壊してしまったことも知りました。教育に携わる先生たちや知識人が次々と処刑され、学校は閉鎖され、学ぶ場を失った子どもたちは将来の可能性を奪われました。その影響は今も続き、農村の子どもたちが十分な教育を受けられない原因のひとつになっていると聞きました。

また、医療も教育と同じように破壊されてしまいました。病院は閉鎖され、医師や看護師は「知識人」として迫害され、多くが命を落としました。基礎的な医療体制は崩壊し、病人でさえ治療を受けられずに亡くなったといいます。その影響は世代を超えて続き、今も農村の人々にとって医療は高額で、子どもたちが治療費を稼ぐために学校をやめて働かざるを得ないという悪循環を生んでいます。現地のアンコール小児病院を訪れたとき、医療と教育、そして貧困が密接につながっていることを強く実感しました。



キリングフィールドの墓地



トゥール・スレン虐殺博物館で見た犠牲者の写真

「寺子屋で見た教育の希望」

そんな中で、日本ユネスコ協会連盟が行う世界寺子屋運動によって建設された「寺子屋」を訪問することができました。寺子屋は、農村地域に住む低所得家庭の子どもたちが、働きながら学べる場所です。ここでは短縮型のカリキュラムで必要な勉強を効率的に学び、資格も取得できます。さらに、月 3.5 ドルの手当や学用品の無償配布、月2 回の食事支給などがあるので、子どもたちは安心して寺子屋に通うことができ、また親にとっても子どもを寺子屋に通わせる大きな理由になります。授業中に生徒たちはとても元気で手を挙げて積極的に答え、正解すると互いに励まし合う姿が見られました。中退した子どもや年齢・性別に関係なく学べる環境が整っていることも印象的で、教育格差をなくすためには、通いやすく、生活面でも支援がある環境が重要であると強く感じました。



子ども達と遊んでいる様子



熱心に学んでいる様子

「医療と教育の現場から学ぶこと」

次に、医療について学ぶためにアンコール小児病院を訪問しました。この病院は農村部の貧困家庭の子どもたちに無料で医療を提供する独立した非営利の小児専門病院です。ここで特に印象的だったのは、親が子どもに「病院は怖いところ」「お医者さんに切られる」と言い聞かせているという事実でした。最初は驚きましたが、実際には医療費が払えないという現実を隠すための言い訳であり、子どもを病院に連れて行くこと自体が家計にとって大きな負担となっている背景があると知りました。その結果、子どもたちは病院に対して恐怖心を抱くようになってしまいます。こうした心理的な壁を和らげるために、病院では待合室に遊具やアニメ映像を設置し、子どもが安心して過ごせる環境作りに取り組んでいることが非常に印象的でした。

一方で、この病院では単に無料で医療を提供するだけでなく、母親向けの教育プログラムを通じて地域全体の健康改善にも力を注いでいました。例えば、看護師が栄養価の高い食事の調理法を実演する「料理教室」や、親子で正しい歯磨きの方法を学ぶプログラムが行われており、母親自身の健康や衛生に関する知識を高めるだけでなく、子どもの健康管理能力を育む効果がありました。さらに、こうした知識は家庭から地域社会へと広がり、持続的な健康改善につながっています。

このような取り組みを通して、無料の医療を提供するだけでは医療格差を根本的に解消できず、病気を予防する知識や技術を普及させることがより重要であると学びました。教育と医療を結びつけた取り組みの重要性を現場で直接感じ取ることができた瞬間でした。



料理教室でご飯を作っている様子



アンコール小児病院で撮った集合写真

「学びを力に変えて」

このスタディツアーを通して、私は歴史や貧困が教育や医療の格差を生み、それが今も人々の生活に深く影響していることを実感しました。寺子屋や小児病院で出会った子どもたちは、決して恵まれた環境にいるわけではありませんでしたが、学び合い支え合う姿からは未来への希望が感じられました。また、教育や医療は単独では成り立たず、相互に支え合いながら人々の生活を根底から支えていることを強く学びました。

さらに、ポル・ポト政権による破壊の歴史は、教育や医療を奪い、多くの人々の命と未来を失わせました。その影響が今も格差として残っています。このような悲劇を二度と繰り返さないためには、誰もが学ぶ機会を持つだけでなく、カンボジアの過去の歴史を正しく理解し、次の世代に伝えていく教育が不可欠だと感じました。歴史を記憶し続けることこそが、未来の格差や暴力を防ぐ力になるのだと思います。

今回訪れた寺子屋や小児病院の現場では、子どもたちが学び、支え合う姿を通して、未来が変えられる可能性を強く感じました。教育や医療への支援は、単に制度やサービスを提供するだけでなく、生活面や知識面から子どもや家庭を支えることが大切だと学びました。私自身も、この経験を通して学ぶことの重要性や周囲を助ける意義を改めて考え、将来は国連で格差の問題に取り組むことで、社会に貢献したいと強く思うようになりました。

最後に、このツアーを実現してくださった公益社団法人日本ユネスコ協会連盟や公益財団法人かめのり財団の皆様、引率の先生方、現地で支えてくださった方々、そして共に学んだ仲間から心から感謝申し上げます。今回の経験は、私にとってかけがえのない大きな学びとなり、今後の人生や行動につなげていきたいと思っています。